香川大学　大学教育基盤センターニュース

No.5　　平成30年5月

Higher Education Center
Kagawa University

香川大学　大学教育基盤センター
〒760-8521　高松市幸町１－１
Tel　087-832-1151～1154
Fax　087-832-1155
http://www.kagawa-u.ac.jp/high-edu/

目　　次

１．平成30年度の大学教育基盤センターの課題について……1

２．就任及び退任のご挨拶……3

３．全学共通教育の平成30年度実施に向けた研修会（FD）報告……8

４．FDスキルアップ講座報告……10

５．平成30年度新任教員研修会報告……14

６．注目の全学共通科目のご紹介……15

７．新スタッフからの一言……16

1. 平成 30 年度の大学教育基盤センターの課題について

大学教育基盤センター長　高 橋 尚 志

大学教育基盤センターは、かつての開発センター時代に担っていた全学共通教育の企画運営実施の役割に加え、全学の地域教育、e-Learning をはじめとした ICT 教育全般、全学に対する FD や教員研修等の能力開発も任務とした、前センター長曰く「ウィングを広げた」センターに衣替えをして４年目となる。この間センターは、全学の教育改革の中核を担い、新カリキュラムの実施や教育制度の改革を行ってきている。今年度は香川大学にとっては組織的にも全学的に大きくその姿を新たにし、教育改革の一大結節点となる年である。本大学教育基盤センターも大学全体の改革を見据えながら、以下に示す大きく８つの課題に今年度取り組んで行くこととなる。

1. 第３期中期目標・中期計画の年度計画の円滑な実施
2. 改革の第一段階 : 全学共通科目におけるクォーター制運用を含む全学共通教育カリキュラム改革の円滑な実施
3. 改革の第二段階 : 平成 30 年度以降の全学の改革に資する教育プログラムと全学共通教育カリキュラムの検討と具体化、および安定開講のための体制作りの検討
4. 主題Ｃ－基礎科目の円滑な実施および次年度に向けた改善と、COC／COC+事業に関連した全学共通教育科目の充実
5. 「四国における e-Knowledge を基盤とした大学間連携による大学教育の共同　実施」事業（知プラ e 事業）等 ICT を活用した授業、遠隔授業等の円滑な実施及び実施体制の充実
6. 大学教育基盤センター「国際教育部」の体制整備と、学生の英語力向上施策の実施
7. ネクストプログラムの拡充
8. ホームページの整備やセンターニュースの発行等を通じた情報発信強化

専門分野にとどまらない幅広い教養を身に付けさせることを第３期の中期目標の柱にしている。第１の課題は、続く第２および第３の課題と関連する所でもあるが、内容はその目標の達成のため学問基礎科目の履修方法を改め、教育内容の充実をはかり、さらに新たな授業科目学問への扉の新設・充実などである。年度計画では学問基礎科目の履修方法の検証と改善が含まれ、他にも例えば学問への扉の充実発展もここでの計画のうちとなる。

第２で言う改革の第一段階とは、平成 29 年度に実施した一連の教育の枠組みやプログラムの刷新と新カリキュラムの実施を意味し、今年度においても安定的に実施することは必須である。

その上で、第３の課題にある改革の第二段階とは、第一段階では着手し切れていない部

分、例えば専門分野ではない分野でもより広くまたより深く学ぶためのプログラムを設計すること、およびその教員組織を含めた実施体制を構築することになる。一例を挙げれば、創造工学部設置にともない創造教育（DRI 教育）の精神を全学に波及することが、本学に課せられた社会的な要請でもあるが、その一端を担うプログラムを第７の課題のネクストプログラムとあわせて検討することが課題となる。

第４の課題は、言うまでもなく本学の特色である地域課題であり、とりわけ主題 C に結実させた地域主題の充実発展は必須である。

第５の課題は、知プラ e 科目として提供される e-Learning 科目等の充実は、学生の学びの機会をより豊かに提供する上で必須な課題となっている。

第６に掲げているものは、一つには英語教育の充実である。本学では１年終了時での TOEIC 平均点数を第２期目標期間末と比較して５%向上させる中期計画を有し、戦略性が高く意欲的な課題と位置付けられている。このため、今年度より英語力向上のために授業内容の改革、イングリッシュカフェの積極的な利用、ネクストプログラムの充実発展に加え、TOEIC の 300 点未満の学生には単位を認めない制度を開始することとした。英語の担当者はもちろん、センターをあげてこの課題には取り組む必要がある。また、当センターの国際教育部とインターナショナルオフィスとの連携や業務の棲み分け見直しがまだ出来ていない部分があり、この解決も喫緊の課題として位置付けている。

第７にあるのは、従来よりあるネクストプログラムをより充実発展させることに加え、人文系の分野や上述の創造教育（DRI 教育）などの特定の分野を一定系統立てて学ぶための新たなネクストプログラムをラインナップすることを課題としている。

最後に、これらさまざまな改革を広く内外に伝えるために、このニュースレターやホームページの充実は必須と考えており、今年度中にはリニューアルしたホームページで新たに情報発信する予定である。

大学教育基盤センターの本年度の事業計画すべて触れたわけではないが、センター教職員一同、上述の課題や日常の全学共通教育の円滑な実施に邁進していく所存である。皆さま方におかれては、どうぞよろしくご指導ご鞭撻の程お願い申し上げる次第である。

2. 就任及び退任のご挨拶

共通教育部長　　寺　尾　　徹

この４月より、共通教育部長となりました。教育学部に所属し、専門は地球科学の一分野である気象学です。地球温暖化の問題や持続可能な社会をデザインする問題など、時代が進むごとに、社会の構成員が世の中（ここには海も空も動植物も川も社会も経済も芸術も一切合切が含まれるのです）のしくみをひろくとらえて力を合わせていくことが求められるようになったことを実感します。全学共通教育の役割はいよいよ大きくなりました。

私自身が学生だった 1980 年代後半、私の通っていた大学では、教養教育と言っても、自然科学・社会科学・人文科学の３つの分野からともかく所定の単位を取れば良いといった感じで、教養は要するに知識の範囲の問題だったように思います。まだ大学設置基準の大綱化の前でしたから、規定としては明確だった代わりに形式的な枠ばかりが明確で、何のための教養なのかは不明確だったように思います。私は当時から科学者になるつもり満々だったので、いわゆる「科学者の社会的責任」といった視点から教養教育は大切、と思っていました。なので、このような形式的な知識のつまみ食いのようなあり方には生意気にも疑問を感じていたのを覚えています。

やがて私は大学教員となって香川大学に 2007 年に赴任し、初めて「主題」という科目区分に接しました。現代的課題に対応して科目を体系化し、目的意識を持って学ぶことができるような仕組みがあり、全学の教員の参加で支えている事実はすばらしいものだと思いました。その後も、国際化、情報化への対応、地域社会への視点など、社会が対応すべき課題に対応しながら香川大学の全学共通教育の仕組みを粘り強く発展させていく過程に接してきました。一昔前の教養教育よりも一段階発展した側面を、本学の教育体系の中にいくつも見いだすことができます。多くの先輩、同僚たち、教職員、学生の努力の結晶ですね。本学のこの伝統を受け継ぎ発展させていく仕事に係わらせていただけることに感謝申し上げます。

調査研究部長　　角　道　弘　文

2018 年４月より調査研究部長を仰せつかりました角道（かくどう）弘文です。本学に赴任して 25 年が経過しました。講義科目を担当できるようになった 1999 年度以降、全学共通科目の授業担当としてかかわってまいりましたが、この度の仕事の大きさには身の引き締まる思いです。どうぞよろしくお願いいたします。

調査研究部は、主として全学共通教育にかかるシンクタンクとして、教育戦略室のご指導を受けながら、主にカリキュラム開発と実施カリキュラム等の点検・検証を担うセクションです。具体的には、新規授業のチェックや新規科目群・プログラムなどの設置、科目領域の再編に加え、学事暦の変更、カリキュラムアンケート結果の分析やシラバスチェック、他大学の調査などを所掌しています。

さて、近年は、ポスト真実（Post Truth）の時代だとか反知性主義（Anti-intellectualism）の時代だと言われています。真実でもないことを安易に受け入れてしまう、あるいは、フェイクでも構わないから人々を煽りさえすればよいとする風潮がみられます。また、理屈や議論の積み上げを嫌い問題の本質に近づこうとせず、短絡的に決めつけて耳に心地よいことしか聞かないという振る舞いもみられます。とくに SNS 上では、これらに当てはまることが数多く散見されます。高等教育を修めた若者が、ポスト真実・反知性主義が蔓延している世相を無批判に受け入れてしまっているとすれば、たいへん残念に思えてなりません。

本学では、21 世紀社会の課題解決に積極的に関わる市民（香川大学版「21 世紀型市民」）の育成を目指していて、共通教育で提供している広範な人文科学・社会科学・自然科学に関する知識や種々の主題科目群がその土台の中心となっています。私見ではありますが、事柄の本質を観察・分析できる能力、科学することの大切さ、多様性を理解し互いの価値観を尊重する姿勢などをトータルで学び取れれば、先ほどのポスト真実や反知性主義に十分抗うことができる素養が身につくのではないかと考えます。その意味で、４年一貫の全学共通は重要な意味を持っていますし、本年度より本格的に議論されることになる“デザイン思考教育”やネクストプログラムの新たな分野・テーマの発掘はたいへん意義深いものと認識しております。

調査研究部の所掌業務に対しましては、この２年間、微力ながら傾注する所存です。先生方のご指導・ご協力を賜りますようどうぞよろしくお願い申し上げます。

国際教育部長　　髙　橋　明　郎

４月１日より国際教育部長に任命されました髙橋明郎です。瀬戸大橋開通前年香川大学に着任しました。そもそもの研究対象は所謂「漢文」でしたが、ここ 20 年ほどは台湾研究を主にしております。中国語や経済学部のアジア文化に関する授業に携わると同時に、中国語圏への海外語学研修やネクストプログラム中国語コースの創設などに関わってまいりました。着任の頃と比べますと、１クラス規模の縮小（70 人→30～40 人）、ネイティブスピーカーである教員の積極的登用などが改善された点ですが、一方で必修単位の減少（経済学部や法学部は外国語の卒業要件が最低 16 単位でした）など学生の外国語学習時間自体は全体としては減少しています。

香川大学は以前から、近隣諸大学の中でも多種の外国語教育を提供してきました。英語圏や中国語圏に向けたネクストプログラムや水野前部長の時期に開始された English Café も着実に成果をあげつつあります。外国語の学習を足掛かりに、海外で外国語や専門科目を学ぶ、また学内でも海外の留学生と触れ合う、そうした機会を拡大してゆければと思います。

教育学部　教授　　高　橋　尚　志

３月いっぱいで４年間勤めておりました共通教育部長を退任しました。前任の田中さんから、改革の時期だけど皆さんの意見をよく聞いて進めれば大丈夫だよと言われ、割と簡単に引き受けてしまったのですが、いやはや、大変でした。何が大変かと言うと、中期目標計画にあるものだからやるんだよという程度の位置付けかと思っていたその改革というのがくせ者で、第二期の中期目標期間にカリキュラムの総括を行ってみたら課題山積、改編すると言うよりもそもそも目標としたことがまだ出来ていないじゃないか、ということが多々ありました。ではその目標ではダメだったのか、というと決してそういうことはなく、むしろ先進的な部分がある。その上に、組織改編を行えという当時の藤井センター長の指示に、文科省あたりから来る幾たびかの大波小波。これらに翻弄されつつ、文字通り皆さんの意見を聞きながら、あるいは石井調査研究部長とともにあちこちで説明会をする中でよく皆さんから怒られながら、大がかりな改革案をまとめて歩んできました。文科省の大波の一つが、「教養教育の充実」であり、これ自身は歓迎するところではありますが、苦しい台所事情もあり、まだまだ道半ばなのですが。そういう意味で次の寺尾部長に渡してしまうのは何だか申し訳無い気もしますけど、またフレッシュな顔ぶれで今後の共通教育をもり立てて行って頂ければと思います。私自身は今後もセンター長として大教センターに関わりを持ち続けますので、引き続きどうぞよろしくお願いします。

創造工学部　教授　　石　井　知　彦

この３月末をもちまして大学教育基盤センター調査研究部長を退任することになりました。2014 年４月に着任して以来４年間、武重雅文・元大教センター長からは「大教センターの PDCA サイクルのうちの P と C に対して責任を持て」との指示を受け、また藤井宏史・前教育担当理事からは「大いに夢を語る部署であれ」との言葉をいただき、主に全学共通教育カリキュラムの改革に携わってまいりました。大教センター主担当教員の皆様と、学部選出および科目領域選出の共通教育コーディネーターの先生方とともに、自由な発想と議論を行い、それらを形に残していくことができたことは、大変貴重な経験をさせていただきました。文系の先生方は話し方や説明が大変上手なので、理系の私としては大いに勉強させていただきました。調査研究が主たる業務だったため、文科省の動向や他大学の改革の進捗情報も集まり、次第に、改革が比較的遅れていた香川大学における危機感のようなものを感じ、それが私を動かす大きな原動力になったと思います。同時期、ともに改革に取り組んだ高橋尚志共通教育部長には、公私に渡り大変お世話になりました。教育に対する情熱、知識の高さ、強い責任感と行動力、高いプレゼン能力と説得力など、高橋先生からは多くのことを学びました。また教育担当理事、教育戦略室および教育戦略推進会議の先生方、全学教務委員会の先生方、修学支援グループおよび学務グループ、さらに各学部の学務係の職員の皆様方には、この間の教育改革に際し、多大なご理解とご協力をいただき誠にありがとうございました。まだ、能力開発部長としての任期が残っておりますので、大教センターのさらなる発展に努めてまいります。引き続きどうぞよろしくおねがいいたします。

経済学部　教授　　水　野　康　一

前任の高木文夫先生から外国語教育部長職を引き継いだ2012年当時、担当していた特別教育プログラム（ネクストプログラム）検討部会と共通教育部、外国語教育部との調整を進める必要がありました。自分がこの仕事を引き受ければ、話がスムーズに進むだろうと考えたのが事の始まりでした。そもそも香川大学の外国語教育の現状と将来について高い問題意識があったわけでもなく、また就任当初はネクストプログラムの準備と実施に追われたこともあり、この６年間、本務であるはずの外国語教育の企画実施に関してはセンターのベテランの先生方にすっかり任せきりでした。

任期中盤の 2015 年には大学教育開発センターの組織改革があり、外国語教育部も国際教育部という名称に変更されました。大きな課題はインターナショナルオフィスとの連携強化を進めることでしたが、人事の流動性などにより、国際教育部の組織体制づくりは３年

たった今も構築中の段階です。

任期終盤の２年間は、特に第三期中期目標（学部生の英語力向上・TOEIC スコア５％アップ）の達成に向けてのカリキュラム・シラバス改革に取り組みました。紆余曲折をへて何とか新 e-Learning システムや TOEIC スコアの最低基準の全学導入にこぎつけましたが、その重要な検証作業はまだこれから始まろうとしています。

大学教育基盤センターの先生方や事務の皆様には、これまで長年にわたってお世話になったことを心より感謝いたします。しかし、振り返ってみれば、任期が長かったにもかかわらず、期待されたほど仕事ができておらず、積み残した課題も多いと感じています。山下教育担当理事・副学長からは、新年度以降も国際教育部「副部長」として新部長の高橋明郎先生を補佐せよと命ぜられています。というわけで、まだしばらくのあいだセンターの先生方や事務の皆様には引き続きお世話になります。よろしくお願いいたします。

3. 全学共通教育の平成 30 年度実施に向けた研修会（FD）報告

日時：平成 29 年 12 月 5 日（火）13:20－16:10
場所：教育学部 415 講義室ほか
対象：全教員（特に平成 30 年度全学共通教育担当予定の教員）

第１部 全般的課題
　　１．全学共通教育新カリキュラムの検証（高橋尚志大学教育基盤センター長）
　　２．クォーター制の検証（石井知彦調査研究部長）
　　３．全学共通教育事務手続について
第２部 分科会
　　１．主題科目「主題 B」分科会
　　２．学問基礎科目分科会
　　３．コミュニケーション科目「大学入門ゼミ」分科会
　　４．コミュニケーション科目「情報リテラシー」分科会
　　※主題科目「主題 A」、主題科目「主題 C」、既修外国語（英語）は別途実施

１．全学共通教育新カリキュラムの検証　　高橋尚志（大学教育基盤センター長）

現在進めている全学共通教育新カリキュラム改革は、大学教育目標である『共通教育スタンダード』の実質化を中心に様々な背景によって行われている。そのために平成 29 年度のクォーター制の導入とともに、学問基礎科目で文・理系の偏りを無くす履修方法への変更並びに擬似クォーター制の実施（平成 29・30 年度）等が行われている。さらに成績基準の標準化、ネクスト・プログラムの再編強化（平成 31 年度予定）も進める。なお平成 27 年度カリキュラムアンケートの結果、１～２年生の１週間の授業外学習時間が５時間以下の学生が非常に多いことが明らかとなり、これをいかに解消するかが今後の大きな課題である。

２．クォーター制の検証　　石井知彦（大学教育基盤センター調査研究部長）

クォーター制については、履修偏りの解消・全学共通教育スタンダード達成に対する取得単位数不足への対処等を背景に、平成 29 年度より全学教育カリキュラムにおいて導入し

ている。学問基礎科目における擬似クォーター制実施については、その検証結果に基づき未導入学部における導入を検討する。なお2017 年度入学生対象アンケートの結果、学問基礎科目について多くの様々な学問分野に触れることを重視する学生の方が多いことが分かった。またクォーター制を導入するメリットとして、教育効果・学生の就職活動への便宜、デメリットとして教員の負担増、学生の自学自習時間の不足等が示された。

＊「３. 全学共通教育に関する事務手続き」の内容は省略する。

（参加者：53 名）

続く第２部「分科会」では、授業担当者を中心に４つの分科会（別途実施は除く）に分かれて、より具体的な討論と情報交換を行った。こちらの内容については、『香川大学教育研究』第 15 号 91 頁以降に詳細を掲載しているので、参照いただきたい。（文責：中住幸治）

4. FD スキルアップ講座報告

■講座名：「学生の学びを促すシラバスの書き方」
■日　時：平成 29 年 12 月 25 日（月）13:00～14:30
■場　所：幸町北キャンパス研究交流棟６F　第２講義室
■講　師：葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

この講座は、シラバスの各項目の書き方を丁寧に教授するセクションと、ワークを通じて、適切な書き方を学ぶセクションに分けられていました（ワークは、適切な書き方をしていないシラバスの問題点を指摘し、書き直す、という課題に取り組むもの）。ワークの挿入は非常に効果的だったようです。レクチャーの内容が記憶に定着しますし、グループのメンバーとの意見交換もできます。また「誤りを直す」という作業を通じて、自分が一から書く場合よりも、ポイントとなる部分を効果的に学ぶことができるでしょう。実際にワーク後のシェアをみると、参加者がしっかりポイントを身につけていることが見て取れました。参加者は５名とやや少なめでしたが、みなさん熱心にとりくんでいたところが印象的でした。（文責：佐藤慶太）

■講座名：「基礎から学ぶ学習評価法」
■日　時：平成 29 年 12 月 25 日（月）14:40～16:10
■場　所：幸町北キャンパス研究交流棟６F　第２講義室
■講　師：佐藤慶太（大学教育基盤センター准教授）

佐藤慶太准教授による「基礎から学ぶ学習評価法」が開講され、学内外から５名の参加者がありました。今回の講座の参加者は、ご専門が多岐にわたったため、多様なお話を聞くことができました。講座の中でも特に興味深かったのが、担当する授業での成績評価方法を紹介するワークです。ある先生は語学能力の評価について、ある先生は危機管理能力の評価について等、それぞれの授業で測定しようとしている能力を示し、その評価方法を紹介しあいました。FD を担当するという理由もあり、報告者はできるだけ色々な評価方法を採用するようにしていますが、自分の専門領域を離れたケースはなかなか想定できません。参加者の皆様は、今回の講座を通して、学習評価法の基礎を学ぶことができたのはもちろんのこと、多様な授業スタイル、評価方法を知ることもできたのではないでしょうか。

（文責：西本佳代）

■講座名：「学生参加型授業の技法」
■日　時：平成 29 年 12 月 25 日（月）16:20～17:50
■場　所：幸町北キャンパス研究交流棟６F　第２講義室
■講　師：西本佳代（大学教育基盤センター講師）

「学生参加型授業の技法」と題したこの講座、その大部分が受講者参加型で進められました。まず、アクティブラーニングが導入される背景について簡単に解説がなされた後、アクティブラーニングに関するよくある疑問（例えば、アクティブラーニング型授業は大人数の授業にはむかない？など）をいくつか取り上げ、その疑問に対する回答をグループで考えた後で、講師から解説がなされました。参加者からはこうした疑問自体がナンセンスだという意見もありましたが、講師からはこうした疑問を持つ教員は依然として少なくないとの説明がなされました。その後、学生参加型授業の技法をいくつか取り上げ、その技法を参加者が自身の経験も交えながら紹介した後で、講師から補足説明がなされました。参加者自身の経験も交えながらの紹介ということで、講師からの一方向的な解説では得られないような傾聴に値する話も多く聞かれました。なお、アクティブラーニングに関するよくある疑問については、「全学共通科目教員ハンドブック」に掲載されていますのでぜひご参照いただければ幸いです。（文責：葛城浩一）

上記３講座に関して、今年度からはじまった新たな試みを紹介します。12 月 25 日に開催される３つの講座と１月 12 日のワークショップ「シラバス・授業を改善しよう！」が一つのパッケージとして提供されるようになりました。これまで、このようなレクチャーと実践講座のコンビネーションは、９月の新任教員ワークショップ（合宿型）でのみ体験できるものでした。それに参加できない先生方にも同様の学びを得る機会が開かれたことの意義は大きいと思われます。

残念ながら、１月 12 日の講座には申し込みがなく、パッケージ講座の本格実施にはいたりませんでした。来年度は、多くの方に参加してもらえることを期待しています。運営側としても、より参加しやすいスタイルを追求していきます。

■講座名：「「アカデミック・スキル」をどう教えるか」
■日　時：平成 30 年３月１日（木）13:00～14:30
■場　所：幸町北キャンパス 422 講義室
■講　師：佐藤慶太・葛城浩一（大学教育基盤センター准教授）

この FD は、香川大学で初年次必修科目として開講されている「大学入門ゼミ」の担当者向けに開設されました。今年で６年目になります。「日本語技法をどう教えるか」（３月６日開催）とペアになりますが、本講座では特に、「情報整理の方法」、「レポートの書き方」、「プレゼンテーションの方法」の教え方をとり上げています。参加者は、『大学入門ゼミハンドブック』（「大学入門ゼミ」担当者向けに大教センターが毎年刊行している冊子）の使い方を学ぶとともに、それぞれのスキルを教えるにあたって効果的なワークを、学生の立場で体験します。

今年度の講座で印象的だったのは、参加者同士の情報交換が活発だったことです。質疑の時間、一人の参加者の「他の学部の学生さんはどんな感じでしょうか」という発言をきっかけに、香川大学の各学部、他の大学の初年次生の様子について、有益な情報交換がおこなわれました。スキルアップ講座は、こういった情報交換の場としても機能するのだなあと改めて感じたひとときでした。むしろこういった情報交換をメインとした講座があってもよいかもしれません。（文責：佐藤慶太）

■講座名：「「日本語技法」をどう教えるか」
■日　時：平成 30 年３月６日（火）13:00～15:10
■場　所：幸町北キャンパス 422 講義室
■講　師：高水徹（香川大学インターナショナルオフィス講師）

高水徹講師による「「日本語技法」をどう教えるか」が開講されました。この講座は、主に、次年度大学入門ゼミ担当者を対象に開講され、共通コンテンツのひとつである「日本語技法」、の教え方を扱います。６つの技法、すなわち、①教職員へのメールの書き方、②書き言葉による手順の説明、③推敲の技法、④比較・対照の技法、⑤箇条書きの技法、⑥要約の技法、の教え方を２時間（休憩時間除く）かけて学びます。今回の講座で非常に印象的だったのは、メールを書けない学生が増えているという参加者からの指摘です。講座では、①教職員へのメールの書き方、を扱います。しかし、学生の通信手段は LINE 等になっており、メールを書くことのハードルが年々あがっているのではないか、という指摘

がありました。確かに、最近、「〇〇様」という宛先のないメールを学生からもらう機会が増えたように思います。それも通信手段の変化によるものなのでしょうか・・・。学生時代はそれでもいいのかもしれませんが、社会人になれば（今のところ）メールは欠かせない通信手段となります。学生文化と社会人の常識、両方を意識してコンテンツを作成する必要があるのだなと、改めて感じました。（文責：西本佳代）

■今後のスキルアップ講座の予定

SPOD フォーラム 2018	８月 29 日（水）～８月 31 日（金）
新任教員研修会 「よりよい授業のための FD ワークショップ」	９月 13 日（木）～９月 14 日（金）
始めよう！アクティブラーニング型授業 －協同学習・話し合いの技法編－	９月 25 日（火）13:00～14:30 幸町北キャンパス 423 講義室
始めよう！アクティブラーニング型授業 －協同学習・教え合いの技法編－	９月 25 日（火）14:40～16:10 幸町北キャンパス 423 講義室
始めよう！アクティブラーニング型授業 －協同学習・問題解決の技法編－	９月 26 日（水）13:00～14:30 幸町北キャンパス 423 講義室
始めよう！アクティブラーニング型授業 －協同学習・図解の技法編－	９月 26 日（水）14:40～16:10 幸町北キャンパス 423 講義室
始めよう！アクティブラーニング型授業 －協同学習・文章作成の技法編－	９月 27 日（木）13:00～14:30 幸町北キャンパス 423 講義室
初心者のためのクリッカー講座	９月 27 日（木）14:40～16:10 幸町北キャンパス 423 講義室
「日本語技法」をどう教えるか	３月５日（火）13:00～15:10 幸町北キャンパス 423 講義室
「アカデミック・スキル」をどう教えるか	３月７日（木）13:00～14:30 幸町北キャンパス 423 講義室

5. 平成 30 年度新任教員研修会報告

日時：平成 30 年４月６日（金）9:30～17:10
場所：研究者交流スペース（研究交流棟５階）

【プログラム】

午前の部 9:30～12:00

１．香川大学の教育について	山下明昭（教育担当理事）
２．香川大学の研究について	片岡郁雄（研究・産官学連携・教員評価担当理事）
３．香川大学の地域連携推進について	白木渡（産官学連携・特命担当副学長）
４．香川大学のコンプライアンスについて	真鍋光輝（総務・労務担当理事）
５．各グループからの事務説明	

午後の部 13:30～17:10

１．午後の部の趣旨説明	石井知彦（大教センター能力開発部長）
２．アイスブレーキング	佐藤慶太（大教センター）
３．全学共通教育の運営体制について	高橋尚志（大教センター前共通教育部長）
４．全学共通科目の枠組みについて	石井知彦（大教センター前調査研究部長）
５．平成 30 年度全学 FD プログラムについて	葛城浩一（大教センター）
６．スキルアップ講座体験	西本佳代（大教センター）
７．新任教員お悩み相談	

今年度より４月６日（金）に日程を繰り上げて、香川大学に着任された先生方を対象とした新任教員研修会が開催され、25 名の参加がありました。ここでは、大学教育基盤センターが企画・運営した午後の部についてご紹介します。

午後の部では机が５人一組５グループ構成となるように配置され、参加者は指定されたグループに着席しグループ単位で受講されました。午後の部の大きな特徴は、全項目が協同学習形式で行われることです。香川大学での全学共通教育に関する様々な事について学んで頂くと同時に、これから授業に臨んで頂く上で応用が可能な多様な手法を、実際に学生の立場として体験することで、参加された先生方にアクティブラーニング的要素を活用しながら、これからの授業をよりスムーズに進めて頂く事も意図して構成されています。参加された先生方も、最初こそややお疲れの様子もありましたが、アイスブレークから始まる協同学習が進むにつれて、笑いやにこやかさが増しグループ間の対話も活発になり、楽しく受講されていました。最後の新任教員お悩み相談では、最初にグループ内で現在困っていること等を話し合うことで、お互いの悩みや対策等を共有されていました。その後各グループが業務・授業・科研費等に関する質問を出し、それに対して各学部や部局から来られた教職員の方々から率直かつ丁寧な回答やアドバイスをいただきました。この研修はさらに、大学の職場では普段顔を合わせることが少ない異なる学部学科の先生方が同じグループ内で交流を深める機会ともなっており、高橋センター長（前共通教育部長）が言われていた「知のネットワーク」を広げる一助になっているように思います。今年度も様々なテーマの「スキルアップ講座」が企画されていますので、興味を持たれた方は是非そちらの方にもご参加いただければ、と思います。（文責：中住幸治）

6. 注目の全学共通科目のご紹介

■学問基礎科目「学問への扉」　自然科学基礎実験

この自然科学基礎実験は文系学生のための理科の実験の授業です。最近の学生は（こういう書き方をすると〇〇みたいでイヤですが)、高校の早い段階で大学入試を想定し、文系・理系に分けられるようになっているため、科目によっては小・中学生レベルの知識しかない場合があります。「理科離れ」ということが問題視されるようになって、ずいぶん経ちますが、特に日本においてはもうそれはしっかりと根付いてしまい、もはや取り返しがつかないのではという気さえ致します。

本学において、全学共通スタンダードとして特に「③広範な人文・社会・自然に関する知識」を身につけることとしているのは、そういう背景も踏まえてのことだと思われますが、教員の想いとは裏腹に、いわゆる文系学生は文系科目を、理系学生は理系科目を履修する傾向があり、このことが問題視されてきました。香川大学においては希少糖関係や微細加工デバイスをはじめとしたものづくりなど特色ある自然科学的研究も盛んに行われており、これらに興味と関心を持ってほしいのですが、そのようなことにふれる機会が乏しいという問題もありました。こういう問題は多くの教員がそれぞれ感じていたことであり、そのような問題意識のもと本授業は構想されました。

この授業は、医・農・工・教育（理科）の各部局の総勢 20 名程度の教職員が実施委員会を組織し、物理学・化学・生物学・地学の４つの自然科学の分野の実験テーマを分担して担当しています。2015 年度に高学年向け教養科目として試行を行い、実際に高学年学生に体験してもらった後、その難易度や妥当性などに関して吟味を行いました。その結果を踏まえて2016年度より開講しましたが、初年度から学生の反応は上々でした。そのせいか、2017 年度は定員 40 名に対し 100 名を超える受講希望者が来るコンテンツとなり、それを受けて 2018 年度以降に定員増を行うことを決意した次第です。課題は多いのですが、全国的に見ても例が少ない「文系学生向け」の自然科学基礎実験をさらに充実させるべく我々も努力を続けていきたいと考えています。

（文責：鶴町徳昭）

7. 新スタッフから一言

教育・学生支援部長　高 橋 神 奈 男

平成 30 年４月に教育・学生支援部長に就任した高橋神奈男です。よろしくお願いいたします。

国立大学勤務は８大学目です。約 17 年、入試、教務、学生支援、就職支援等の管理職として経験してきました。近年は、全学教育（共通教育、教養教育）の改革、教育・学生支援機構の構築、障がい学生支援室の構築、障がい学生修学支援の課題の対応、教員養成の課題対応など、関係教職員と職務に当たってきました。

そのような中で、国立大学に入学してくる学生の大多数は、高校まで学年及びクラスで成績上位層のはずなのに、なぜ大学に入って、成績不良、学修についていかれなくなるのか、授業にも大学にも出てこなくなるのか、ひいては休学、退学に至ってしまうなど、いわゆる落ちこぼれになってしまう疑問をもちつつ、仕事に当たってきたかと思います。（そのような疑問をもつのは、自分が高校生時代成績不良生徒だったからに他なりませんが。）

学修についていかれなくなる理由には、専門教育等に関する高校までの科目の学習が理解されていない、不本意入学により意欲がわかない、希望に燃えて入学したのに大学での授業、勉強がつまらない、など様々な理由があると思いますが、大学生の時期は、将来の人生に向けて人間形成の重要な期間であり、ひとりでも多くの学生が有意義な大学生活を過ごしてほしいと願い、仕事をしてきたつもりです。

大学は人材育成の場です。大学教育基盤センター、教育・学生支援室は、その一翼、要を担っている部署ですので、関係する教職員と力を合わせて（教職協働で）仕事をしていきたいと思います。

教育・学生支援部次長（併任）修学支援グループリーダー
大 麻 敬 洋

平成 30 年４月１日付けで、総務グループから異動してまいりました大麻と申します。

昨今、学部改組などの大学改革が進む一方、法人組織自体の有り様も加速度的に見直される気配があります。そうした中、大学教育基盤センターは徐々に守備範囲を広げ、学部教育等における重要性がますます高まっています。

微力ではありますが、本センターの運営と第二段階に差しかかっている全学共通教育改革に少しでもお役にたてればと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

修学支援グループ　サブリーダー　圖 子 賀 津 美

平成 30 年４月１日付けで教育・学生支援室修学支援グループに配属されました圖子（ずし）と申します。

３月までは、香川高等専門学校で勤務しており、３年ぶりに大学に戻って参りました。久しぶりの香川大学は大きな変化を迎え、とまどうことも多いのですが、少しでも早く皆様のお役にたてるよう、努めて参ります。

修学支援グループは、全学部の皆さんと接することができる上に、大学生として学び始める最初の手助けが大いにできる部署でもあります。分からないことや困ったことがあればいつでも訪ねてこられる場所として一番に思い浮かべてもらえるよう、業務に励みたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

修学支援グループ　チーフ　藏 野 哲 朗

この４月より修学支援グループに配属になりました藏野哲朗と申します。香川大学で採用され、最初の配属は教育学部学務係でございました。その後、医学部で 10 年近く勤務しておりましたので、久しぶりの幸町キャンパスでの勤務となります。

10 年近くの間にこの幸町キャンパスの建物も大分変わっており、その変化にわくわくすると同時に戸惑いつつ、この４月の慌ただしい時期を過ごしております。

修学支援グループでは、学生さんの修学サポート、とりわけ全学共通科目の履修が中心になることかと存じます。この修学支援グループで、私は“学生さんメイン”の姿勢で、最善をつくして頑張る所存です。

どうぞよろしくお願いいたします。

原稿を募集しています。

☆全学共通科目を担当して感じたことや意見等があれば、是非投稿してください。

★各学部が取り組んでいる教育改革も、積極的に取りあげていくつもりです。

☆宛先は、紀要編集委員会（修学支援グループ）までお願いします。